

國學院大學學術情報リポジトリ

戦前日本における個人後援会の形成と展開：
愛知県選出代議士加藤鏖五郎を事例に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 手塚, 雄太, Tezuka, Yuta メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000408

戦前日本における個人後援会の形成と展開

—愛知県選出代議士加藤鏖五郎を事例に—

手塚雄太

はじめに

大正初年頃から、政治家の名を冠した団体が設立されるようになったことはよく知られている。最も著名なのは、大正三年（一九一四）に結成された「大隈伯後援会」（大隈重信）であろう。同会は第二次大隈重信内閣の後援組織として、第一二回衆議院議員総選挙での大隈系与党の勝利に大きく寄与した。¹ また、大正二年には「木堂会」²（犬養毅）、同四年には「罌堂会」³（尾崎行雄）が設立された。やや下って大正一四年には「床次会」⁴（床次竹二郎）、同一五年には「若槻会」（若槻礼次郎）も設立されている。これらの諸団体は、政治家の人格・思想に学ぶ修養団体であったり、選挙区で集票組織としての機能を果たしたり、はたまた名を冠した政治家が率いる党派の後援組織としての性格を有するものなど様々である。とはいえ、いずれも団体の設立時点において、すでに中央政界において党首級か、閣僚経験者であるなど、全国レベルの知名度を有した政治家を中心に組織された団体という点で共通している。一方で、大正末期になると知名度を有する政治家に限らず、政治家の名を冠した選挙区レベルの個人後援会（以下、単に後援会と記す）的組織が、大正後期から著しく進んだ都市化・大衆社会化、そして中選挙区制の導入によって結成されるよう

になったことが上山和雄によって指摘されている。⁵⁾

さて、蒲島郁夫・山田真裕は選挙期間中の運動組織としてだけではなく、候補者と支持者との間の様々な利益媒介機能を恒常的に果たす後援会は「政治システムと社会との間の結節点の一つ」であり、日本の選挙政治を特徴づけるものとする。⁶⁾ 後援会は利益媒介機能を果たすとともに、レクリエーションや会員の陳情処理など様々なサービスを提供して会員の結束をはかり、特定候補者の当選を果たすための「地盤」となる。⁷⁾ これまでも多くの後援会研究が積み重ねられてきたが、著名な研究としては佐藤文生（大分県）の選挙運動に密着したジェラルド・カーチス『代議士の誕生』⁸⁾がある。また、橋本登美三郎（茨城県）の後援会西湖会、及びその政治的後継者である額賀福志郎の福志会について検討した山田真裕の研究もある。⁹⁾ 山田は西湖会の形成から展開、額賀への継承に至る過程を検討し、西湖会が地域のないし世代的連帯に基づいて橋本を担いだ「連帯のシステム」から、橋本が当選を重ねる毎に成熟し、後援会が功利性を重視する「利益のシステム」へと変化していったことを論じている。

戦前期の後援会に関する研究としては、櫻井良樹が東京市旧市域において、市制施行当初から地域政治を担った「公民団体」が一九二〇年代に徐々に政党系列化し、最終的には後援会化していくことを指摘している。しかしながら、戦後後援会の研究に比すれば、戦前期における後援会の研究は本格的にはなされてこなかった。¹⁰⁾ 後援会の存在がまさに日本政治の特色であることからすれば、後援会に関する研究の重要性は論を待たないが、その歴史的な経緯については十分に論じられてこなかったのである。

そこで本論は、愛知県選出代議士加藤鎌五郎が大正初期に政界に進出し、昭和戦前期にかけて自らの後援会を形成して支持基盤を築いていく過程について、加藤の後援会「五月会」（以下括弧略）の形成・展開過程を検討する。本論は加藤と五月会を事例に、日本の政治的特色である後援会の歴史的淵源を探るものである。

なお、加藤を対象とする理由の第一は、名古屋大学文書資料室寄託の「加藤鎌五郎関係資料」に五月会の機関紙が現存しているほか、愛知県公文書館寄託「加藤鎌五郎関係資料」にも関連史料があること、第二は、後述するように、愛知県は全国でも後援会による政治活動が活発だったと推測されるためである。

第一章 昭和初年における後援会の全国的分布

事例分析を行う前に、戦前期における後援会の全国的分布について確認しておく。昭和二年一月に内務省警保局保安係が作成した「政党员其の他有志者後援団体調」（昭和二年一月現在）には、道府県毎に代議士・県議・市議やその候補者の後援団体について、党派・目的・推薦者名・創立年月日・創立時会員数・昭和三年二月会員数・地域等が記されている。¹¹⁾ また、調査をもとに会員数・団体数・被後援者数を集計した一覧表が作成されている。

本史料が認識する「後援団体」の性格は史料上に明示されていない。しかし、道府県毎の欄に団体名があるにも関わらず、一覧表に算入されていない団体があることから、その性格を窺い知ることが出来る。例えば北海道では五三団体が記されているが、一覧表上には五団体と記されている。個別の団体をみると「自派の主義主張を市政上に実現し政友会政策に共鳴同志の団結地盤の拡張を目的とす」（小樽公正会）という特定候補者の応援を目的としない団体は算入されず、「東武を政治的に後援し併せて高説を聞き指導を受けたるものとす」（牧堂会、牧堂は東武の号）といった特定候補者の後援団体であることが明確な団体が算入されている。このことから、各道府県での調査段階における「後援団体」認識には地域差がある一方で、情報を集計した警保局では特定候補を支援する団体を「後援団体」として選別し、一覧表に算入したと推測される。地域毎のばらつきは否めないが、本史料から後援会の大まかな全国的分布

を把握できる。

一覧表によれば、全国で三三四の後援団体が存在し、後援団体会員数は二四九、三七二名、後援団体からの支持を受けている被後援者数は一七〇名に上っている。統計表から、会員数・団体数・被後援者数の上位一〇位の道府県を記したのが表1である。会員数・団体数・被後援者数のすべてで上位となっているのが、大阪（会員数一位、団体数三位、被後援者数二位）、愛知（会員数二位、団体数一位、被後援者数一位）の二府県である。昭和初年の大阪府と愛知県において、個人後援会的な団体が多数存在していた、もしくは両府県において、新しい政治勢力として認識されていたといえよう。¹²そして、その愛知県において、もつとも早く組織されたのが、大正九年五月に結成された加藤鏝五郎の後援団体五月会であった。

表1 後援団体会員数・
団体数・被後援者
数上位10位

順位	道府県名	会員数
1	大阪	41,481
2	愛知	39,684
3	鳥根	22,552
4	山口	17,890
5	群馬	17,092
6	茨城	15,481
7	三重	14,377
8	高知	13,841
9	新潟	9,727
10	東京	7,502

順位	道府県名	団体数
1	愛知	53
2	茨城	43
3	大阪	34
4	山口	25
5	三重	24
6	群馬	18
7	高知	11
8	東京	11
9	静岡	11
10	京都	9

順位	道府県名	被後援者数
1	愛知	30
2	大阪	24
3	東京	11
4	静岡	7
5	新潟	7
6	愛媛	7
7	三重	6
8	京都	6
9	茨城	5
10	群馬	5

※内務省警保局保安課「政党员
其の他有志者後援団体一覧
表」より

第二章 加藤の名古屋政界進出と支持基盤

加藤鏖五郎の略歴

加藤と五月会の検討に入る前に、加藤の略歴を簡単にみておく。加藤は明治一六年（一八八三）、愛知県東春日井郡水野村（現瀬戸市）に、陶画工・加藤九歳の三男として生まれた。瀬戸町立陶原尋常小学校、同高等小学校を経て瀬戸陶器学校に入学したが中退し、愛知医学校（明治三六年に愛知県立医学専門学校となる、現在の名古屋大学医学部）¹³へ転じた。在学中には同校の同窓会雑誌の編集を頼まれ「昊天」の名で筆を揮っている。三八年に卒業後は岐阜県立病院、津島済生病院長を経て、四一年に名古屋市中で内科医院を開業した。幼いころから政治への関心を有していた加藤は、医師となった後も論説を発表し、愛知県の有力紙で非政友会系地方紙『名古屋新聞』の懸賞論文への投稿を機に同紙の論説を執筆するようになり、開業医を営む傍らで記事を執筆したという。¹⁴

大正二年（一九一三）、名古屋市会議員選挙に三級から出馬し当選、以後昭和四年（一九二九）まで市議会に議席を有した。名古屋市会選出馬の際に名古屋新聞社長で名古屋市議の小山松寿（後衆議院議員）と衝突して以降は、『名古屋新聞』と並ぶ愛知県の有力紙で政友会系地方紙『新愛知』の客員になるとともに、新愛知新聞社社長大島宇吉の後援を得、名古屋における政友系議員として当選を重ねる。また、大正四年には愛知県会議員となり連続四期当選を果たした。その後、大正九年の衆議院議員総選挙で名古屋市を選挙区とする愛知県第一区から無所属で出馬したが次点で落選し、大正一三年の総選挙で政友本党から出馬し初当選する。

国政に転じた後は、政友本党を経て政友会へ入党、犬養毅内閣で商工参与官、米内光政内閣で商工政務次官となる。戦前期においては、憲政会―民政党の小山松寿と並び称される愛知県政友派の中心的人物であった。昭和一四年の政

友会分裂時は中島知久平派に属し、一五年の政党解消後は翼賛議員同盟・翼賛政治会・大日本政治会に属した。戦後、公職追放となるが、追放解除後は第五次吉田内閣で国務大臣・法務大臣を、昭和三三年から三五年には衆議院議長も務めた。昭和三八年に政界を引退し四五年に八七歳で没した。

名古屋市議・愛知県議時代の加藤と支持基盤

加藤が政界へと初進出したのは、大正二年一〇月の名古屋市会議員選挙へ出馬した時のことである。加藤が選挙に出馬した当時の名古屋市政について、以下簡単に確認しておく。

明治三五年から大正初年にかけての名古屋市政は、愛知県知事深野一三、名古屋市長加藤重三郎、名古屋商工会議所会頭奥田正香の「三角同盟」の影響下にあった。しかし大正元年には深野が退任し、二年には県政財界の汚職が連続して摘発されたうえに、遊郭移転問題をめぐる疑獄事件により「三角同盟」を構成した三名が起訴されるに至り、彼らの市政支配は終焉した。一方、大正元年の第一次護憲運動により名古屋でも政友会・国民党による憲政擁護大会、新聞記者による記者大会が開かれるなど政治熱は高まっていた。¹⁶上記の疑獄事件は、高まった政治熱が流れ込む格好のはけ口ともなった。また、翌大正三年のシーメンス事件の後には在名記者団が海軍廓清演説会を開くなど、名古屋における政治熱の高まりの中心に新聞記者の集団がいたことがわかる。

加藤の政界進出も、このような政治的背景と新聞記者等の後援によるものであった。出馬当時の新聞記事には、次のように加藤の経歴が紹介されている。

名古屋市会議員三級候補者加藤鎌五郎君は、明治三十八年優良の成績を以て愛知医学専門学校を出で地方病院長の職を抛ちて当市に來りしは約六年前にて、頗る先輩の矚目する所となり独り同業者間に重んぜらるゝのみなら

ず、君が得意の論文と雄弁とは更に君の名をして大ならしめたり。昨年衆議院議員総選挙に際し蔵内正太郎君を援け、熱弁を振ふて転戦奮闘したる等義氣に富み、然も資性温厚品性高潔身を持つる「極めて謹厳にて、天性政治に興味を有し昨秋名古屋同志会を組織し、現にその幹事たり。君は単に此方面に於て重んぜらるゝのみならず、清話会員中錚錚たる一員にして現に其幹事たり。今や君同志の擁する所となり、市政刷新の大旗幟を翻して其政見を各所に発表しつゝあり。想ふに君の人格、意気、識見、抱負は君をして最も有為多望、高潔醇良なる候補者の一人たらしむるや明かなり、君齡漸く三十一⁽¹⁷⁾

この記述から、加藤が名古屋で開業した医師のなかで「同業者間に重んぜら」れるとともに、雄弁家として名を知られつつあったことがわかる。文中に名のある蔵内正太郎は早稲田大学卒業後、名古屋新聞客員や時事新報名古屋通信員を務めた人物で、明治四五年及び大正四年の総選挙に立候補し、大正四年の選挙では大隈内閣与党の中正会から出馬した（いづれも落選⁽¹⁸⁾）。加藤と小林清作（愛知淑徳女学校長、現愛知淑徳学園創設者）は、政界革新・議会廓清を熱烈に主張する蔵内を支援していた⁽¹⁹⁾。加藤が幹事を務めた名古屋同志会は、蔵内、龍池滴露（名古屋日報）、青柳有美（扶桑新聞）、鈴木清節（大阪毎日新聞）、志水代次郎（新愛知）、手島益雄（日本電報通信）、島碩南（東海新聞）、堀江越南（新愛知）、阪野吞洋（新愛知）、恒川鉉一（名古屋日日新聞）、小林清作、竹内禪扣（女子高等工芸学校長）、中根栄（新愛知）といった新聞記者を中心とする会である。先の記事からは、加藤も明治末から大正初期において高まる政治熱の渦中のなかにあり、そのような人々から推されて市会選に出馬したことが窺える⁽²⁰⁾。

次に見るのは加藤の立候補宣言の冒頭を抜粋したものである。

〔前略〕 鎌五郎政界の腐敗を慨する事久し、夙に挺身革新の先駆たらんを期す窃かに思ふ、政界革新の一大急務は選挙権の行使をして神聖ならしむるにあり、殊に我名古屋市の如きにありては、情実と夤緣、権勢と金力に対抗

して、市民の覚醒を促すより急なるはなしと。

鎌五郎は此意義に於て、昨春同志と共に蹶起、蔵内正太郎君を援けて、赤手空拳鹿を中原に争ひたりき、之れ区々友の当選を欲する私情に非ずして、実に選挙廓清の警鐘たらんとしたりし也。

当時鎌五郎は各所に言へり、之れ名は政談演説と雖も道德に於ては正義、教育に於ては立憲思想の一大宣伝、軟弱の青年に向つては靈火の洗礼にてありしを誇らんと欲するものなりと、当時我徒の不幸にして敗れたりしも、而かも我徒の主張は、猛火飄々荒野を甜むるの概を以て、名古屋選挙界を風靡したりし也。

爾来我徒は、選挙の廓清、政治道德の向上を企図して、名古屋同志会を組織し苟くも機会ある毎に主義の宣伝に努力したりしは市民諸君の諒さる、所なるべし。²¹

加藤は続けて、名古屋市では「大名古屋建設」に向かつて市区改正・運河問題・築港問題・上下水道問題・糞尿処分問題などの課題が山積しているが、「醜聞」・「大疑獄事件」により名古屋市が「醜都」呼ばわりされるなかでは、「市の刷新」・「市会の振肅」・「市格の向上」といった「根本的問題」の解決が必要だと高調している。そして、「選挙の廓清」・「政治道德の向上」をはかるため名古屋同志会が組織されたと述べている。加藤は雄弁を政治的な武器とする政治家として、²²そして腐敗した市政の刷新者として政界に登場したのである。加藤は五一六票を得て一四人の定員中五位で当選を果たした。加藤は大正六年の選挙でも、新たに新愛知の主筆となった桐生政次（悠々）や、名古屋同志会に参加していた小林、中根、恒川、竹内らの後援を得ている。²³

名古屋同志会の支持を受ける一方で、加藤は名古屋市会議員時代からいくつかの業界との関わりを有していた。その一つは医師団体である。大正二年九月、名古屋医師会員の有志七〇余名によって名古屋青年医会が設立され、加藤は幹事の一人に選ばれている。同会は「医会の刷新医風の向上と併せて衛生の完備を図る」ことを目的に設立された

ものであり、加藤は青年医会設立直後に行われた名古屋市医師会代議員選挙で代議員に選ばれている。大正四年に加藤は県会議員補欠選挙に出馬し当選した後にも、青年医会総会で選挙応援への謝辞を述べている。⁽²⁵⁾

大正六年の市会議員選挙における選挙情勢記事でも医師が加藤の有力な支持者として挙げられている。なお、大正六年一月十五日付『関西医界時報』⁽²⁶⁾は、「加藤君は同窓鉄俱樂部員の熱烈なる応援と、講習会講師たるの故を以て床屋の親方連が捻鉢巻での尻押と、君得意の言論を以て政見を発表し、選挙事務所は勿論当日休憩所さへも設けず、アノ得票は、市民に於ける潜勢力の侮るべからざるを証するに足る」と伝えている。⁽²⁷⁾加藤の選挙は、選挙時における加藤の雄弁と、休憩所を設けないなど理想選挙を誇示するものであるとともに、医師と理髪業者等からの支持を受けて行われていたことを示唆している。⁽²⁸⁾

なお、大正二年時点で加藤は政党に所属しておらず、当然公認候補でもなかったが、大正八年の県会議員選挙における『名古屋新聞』の選挙情勢記事は、加藤が「新愛知新聞の公認候補」ともいえる存在であり、「同紙が紙面に演説会に全力を注」いでいたと記している。⁽²⁹⁾加藤自身、新愛知新聞社長大島宇吉が昭和一五年に没した後の回顧談の中で、「私を今日迄育てたのは老社長」であり、市会に初出馬する時に大島から「あなたは政治が好きだ、一つ政界に打つて出てはどうか、微力だがお助けする、やる以上は、社を挙げてやる」と誘われたことを回想している。⁽³⁰⁾大島と大島の経営する『新愛知』が加藤の選挙を支えたことを窺わせる。また、この県会選挙で加藤は名古屋理髪業連合組合、名古屋薪炭商組合、名古屋筆筒長持製造組合、東春郷友会の支持を得るなど、支持を広げている様子も窺える。⁽³¹⁾

市議としての加藤は憲政会系市長に対する警告決議案を発するなど政友系議員として活動した。大正三年の名古屋電鉄電車賃値上げ案の市会提出にあたっては値上げ反対の急先鋒として演説してまわるなど、弁論を武器に活動を続けた。同時期の加藤は「予は常に問題の人たるを好む」、「予は常に正義の味方たるを念とす」、「予は破壊を好む、予

の破壊を好むは新にして健なる建設を欲するが為也」と公言していた⁽³²⁾。この時期の加藤は、医師や理髪業界、新炭商、新愛知新聞社等の支持を受ける一方で、雄弁と清廉さを政治資源とした少壮政治家であったといえよう。

第三章 国政への挑戦と五月会の結成

五月会の結成

加藤の国政初挑戦は、大正九年（一九二〇）五月一〇日に行われた第一四回衆議院議員総選挙である。選挙戦では、憲政会公認の小山松寿、磯貝浩（名古屋市長）、政友会公認の加藤重三郎（元名古屋市長）、医師で国民党公認の小出鈔、無所属の加藤の五名によって三議席が争われた。加藤は市会では政友系として行動していたが、この選挙は無所属で戦っている。加藤はこれまでの選挙と同様に「言論戦」を展開した⁽³³⁾。結果は加藤重三郎が四三三二票、小山が三一四七票、磯貝が二八八四票、加藤鎌五郎が一八三五票、小出が八六四票となり、加藤鎌五郎は次点で落選した。

落選から間もない五月二〇日、「加藤鎌五郎君同情者懇親会」が一八七名の参加によって開催された。参加者からは「次の選挙では必ず当選させなければ吾々の面目に関する」、「吾々の面目はさて置き我名古屋市の体面に関する」、「一団を組織して、大に親睦を計り、而して政治道德の向上を図ろう」、「腐敗道德の向上を主として作ろう」といった声が上ががり、満場一致で団体結成が決した⁽³⁴⁾。六月二日には団体結成のための委員会が開かれ、会の名前を五月会とし会規約を定め、幹事を選出した。規約は次のとおりである。

一、本会は会員相互の親睦を計り兼ねて政治道德の向上を期するを以て目的とす

二、本会は年二回以上総会を開く

三、本会は幹事若干名を置く

四、本会に入会者は幹事会の承認を要す

五、本会経常費は寄付金を以て支弁す

六、本会事務所は当分の内東区高岳町一丁目加藤鎌五郎方に設く

創設当初の幹事銓衡委員には小林清作、奥澤亀太郎（名古屋ミシン裁縫女学校長）、楠太（医学博士）、小林守太郎（工場主）、片野正、市野徳太郎（名古屋時事編輯人、後名古屋市議）、加藤が選定され、五〇名に上る幹事が選出された。常任幹事には、辻欽太郎（愛知医専以来の友人）、古島安一（矢作水力支配人）、市野徳太郎の三名が就任している。⁽³⁵⁾ 常任幹事及び幹事銓衡委員が会の中心的な人物であったと考えられるが、加藤の名古屋市会選挙初当選時に力となった新聞記者を中心とする名古屋同志会とはメンバーが相当異なっている。新聞紙上を見る限り継続して参加していることが判明するのは小林清作のみである。選挙期間中に加藤の応援弁士に立った人物も、上記に挙げた人物のほか、医師の星野致知、歯科医の長屋弘、鮫おこし湖月堂店主田面芳太郎、医師で「鉄俱樂部」⁽³⁶⁾（医師会有志の団体）頭領株の出邊勉三、染料商の常山万吉といった面々で、新聞記者は名古屋毎日主筆の秋庭眞男のみであり、幹事の桐生政次を含めても二名である。五月会に参加した面々も名古屋同志会に参加していたのか、いなかったかは明らかではないが、加藤の選挙を支える主要人物が徐々に変化していたことは間違いない。

しかしながら、五月会の規約に「政治道德の向上」が掲げられたことからすれば、加藤にかけられた期待の内容は変化していなかったともいえる。また、加藤の当選が会結成の目的であることは明白だが、規約上加藤の政治行動を支援する団体とは明記されていない。この点で設立当初の五月会は、名古屋同志会以来の政界刷新を目的とする同志集団的な性格（この場合、加藤は同志集団のリーダー格であるが故に支援を受ける）と、加藤個人に帰属する後援

表2 戦前・戦時期の選挙における加藤の得票数

	内閣	定数	党派	順位	得票数	1位当選者得票	次点候補得票	新聞記事に見る加藤の支持基盤
大正9年	原	3	無所属	4	1,835	4,332	3位候補 2,884	医師団、理髪業組合、東春郷友会のほか、「新愛知新聞の間接援助」がある
大正13年	清浦	3	政友本党	3	4,392	7,552	4,223	医師会、後援団体「五月会」
昭和3年	田中	5	政友会	3	15,734	25,020	8,864	「母体は五月会」…「理髪業組合、運動業組合、愛知医大同窓会、紹介業者、露天組合、洋服加工組合、古物商組合、刃物業者、日雇業組合等の後援がある」
昭和5年	浜口	5	政友会	5	11,517	27,350	10,343	「後援団体たる五月会」、「地元である東区」、「同氏後援の中堅たる医師団有志、少壮弁護士団」
昭和7年	犬養	5	政友会	1	20,931	-	12,274	五月会、東区、「名古屋実業団」
昭和11年	岡田	5	政友会	2	18,374	27,939	14,232	五月会、東区
昭和12年	林	5	政友会	6	16,110	23,462	5位候補 16,875	五月会、東区
昭和14年	阿部	1	政友会	1	39,099	-	21,970	—
昭和17年	東条	5	翼賛政治体制協議会推薦	1	32,928	-	14,722	—

※選挙区はすべて愛知県第1区（名古屋市）、昭和14年は再選挙。

出典 『加藤鎌五郎伝』、『衆議院議員総選挙一覽』、『名古屋新聞』大正9年3月25日、5月1日。『新愛知』大正13年4月25日、5月5日、昭和3年2月19日、昭和5年2月20日、昭和7年2月20日、昭和11年2月14日、昭和12年4月25日。なお、昭和14、17年選挙での新聞情勢記事では支持団体に関する記述を管見の限り確認できなかった。

会としての性格の二つを有していたといえよう。その後五月会は、表2にあるように総選挙における新聞紙上の情勢分析で必ずと言ってよいほど加藤の支持基盤として挙げられるようになる。大正一三年五月一〇日の『新愛知』の選挙情勢記事には「一千に近い五月会員の活動目覚ましく」とあるほか、いわゆる普通選挙法施行後の昭和五年には、加藤の義弟黒田正隆が「二万を有する五月会の会員が唯一の地盤」とも述べている。実

際の会員数は昭和十一年時点で三六〇〇人程度だったと思われるが（後述）、一〇年弱の間に会を拡大し、支持基盤を広げていたことといえよう。なお、加藤は戦後に戦前期五月会の名簿は戦火で失ったと回想していることから、会員名簿も作成されていたことが明らかである⁽³⁹⁾。

五月会機関紙『時事公論』

以下、五月会の活動を名古屋大学文学資料室寄託「加藤鎌五郎関係資料」に残されている機関紙『時事公論』を用いながら検討する。なお、検討に先立って『時事公論』の性格について確認しておく。

発行者は、第一号から「時事公論社」であるがその実態は不明である。また、編集発行兼印刷人は多々羅恬一（創刊号→第二二号）→河村忠之助（第二三号→第三一号）→鈴木銀次郎（第三二号→四二号）→多々羅（第四三号→第八七号）→社本清吾（第八八号→第九〇号）→三浦孫一（第九一号→第九七号）→水野熊治（第九八号→第一〇一号）と変遷している。多々羅は加藤の医学校時代の旧友で五月会の書記、社本は昭和四年に名古屋市会選挙に出馬（落選）した早稲田大学出身の五月会員⁽⁴¹⁾、水野は加藤の秘書役を長年つとめた人物であることはわかるが、その他の人物の経歴は明らかではない⁽⁴²⁾。

大正十一年三月二七日付『時事公論』創刊号の刊行の辞をみると、同紙は「私共同志の名古屋に於ける時事を論ずる機関として其発行を思ひ立つたもの」であるとされている。創刊号には『時事公論』が一万部印刷されているとあるが、これは大正九年の加藤同情者懇親会参加者数と比べてあまりに多い。同時期の名古屋では、大正十一年三月五日に名古屋市の反憲政会・政友系グループとして新愛知新聞社後援のもと「名古屋振興会」なる団体が組織されており、その発会式には一万五千人が結集し、加藤は発起人代表として挨拶を行っている⁽⁴³⁾。この経緯からすると、『時事公

表3 時事公論刊行号と刊行年月日

号数	発行年月日	No※
第1号	大正11年3月27日	1434
第2号	大正11年4月24日	1434
第3号	大正11年5月22日	1434
第4号	大正11年6月26日	1434
第5号	大正11年7月24日	1434
第6号	大正11年8月21日	1434
第7号	大正11年9月11日	1434
第8号	大正11年10月9日	1434
第9号	大正11年11月27日	1434
第10号	大正11年12月25日	1434
第11号	大正12年1月29日	1434
第12号	大正12年2月26日	1434
第13号	大正12年4月9日	1434
第14号	大正12年5月7日	1434
第15号	大正12年6月4日	1434
第16号	大正12年7月16日	1434
第17号	大正12年8月13日	1434
第18号	大正12年9月17日	1434
第19号	大正12年11月5日	1434
第20号	欠	欠
第21号	欠	欠
第22号	欠	欠
第23号	大正13年4月16日	1434
第24号	欠	欠
第25号	大正13年7月20日	1434
第26号	欠	欠
第27号	大正13年9月11日	1434
第28号	欠	欠
第29号	大正13年11月11日	1434
第30号	大正13年12月4日	1434
第31号	欠	欠
第32号	大正14年3月15日	1434
第33号	欠	欠
第34号	大正14年6月22日	1367
第35号	大正14年8月18日	1434
第36号	大正14年9月21日	1434
第37号	欠	欠
第38号	大正14年12月15日	1434
第39号	欠	欠
第40号	大正15年2月27日	1434
第41号	欠	欠
第42号	欠	欠
第43号	大正15年7月26日	1366
第44号	欠	欠
第45号	大正15年11月25日	1369
第46号	昭和2年1月19日	1368
第47号	欠	欠
第48号	欠	欠
第49号	昭和2年6月8日	1371 1372
第50号	昭和2年8月10日	1373
第51号	欠	欠
第52号	昭和2年11月28日	1374

号数	発行年月日	No※
第53号	欠	欠
第54号	昭和3年2月11日	1375
第55号	欠	欠
第56号	昭和3年6月22日	1377
第57号	欠	欠
第58号	昭和3年9月26日	1378
第59号	欠	欠
第60号	欠	欠
第61号	昭和4年1月1日	1379
第62号	欠	欠
第63号	昭和4年5月15日	1380
第63号	昭和4年12月5日	1382
第64号	欠	欠
第65号	昭和4年10月13日	1381
第66号	欠	欠
第67号	欠	欠
第68号	欠	欠
第69号	欠	欠
第70号	昭和5年11月28日	1383 1384
第71号	昭和5年12月18日	1385
第72号	昭和6年1月1日	1386
第73号	昭和6年2月1日	1387
第74号	欠	欠
第75号	欠	欠
第76号	欠	欠
第77号	欠	欠
第78号	欠	欠
第79号	欠	欠
第80号	欠	欠
第81号	昭和6年11月30日	1388
第82号	昭和7年2月16日	1389 1398
第83号	欠	欠
第84号	欠	欠
第85号	昭和7年10月1日	1390
第86号	欠	欠
第87号	欠	欠
第88号	昭和8年1月25日	1391
第89号	昭和8年2月25日	1392
第90号	欠	欠
第91号	昭和8年8月11日	1393
第92号	欠	欠
第93号	昭和8年12月26日	1394
第94号	欠	欠
第95号	昭和9年8月17日	1395
第96号	欠	欠
第97号	昭和11年7月20日	1396
第98号	昭和11年10月30日	1397
第99号	欠	欠
第100号	欠	欠
第101号	昭和12年9月10日	1405

※名古屋大学大学文書資料室所蔵加藤鍬五郎関係資料所蔵分。

※資料No.は加藤鍬五郎関係資料の登録番号である。

※第63号は発行年月日と内容が全く異なるものが2種類存在している。後に刊行された昭和4年12月5日号の号数が誤っていることは明白だが、欠号が多く12月5日号の正しい号数は分からないためそのままとした。

論』は刊行当初、広く名古屋市政友系紙といった性格を持っていたと推測されるが、創刊号以来加藤に関する記述がない号はほぼなく、五月会の動向も同紙から追うことが出来る。大正一三年四月一六日付第二三号からは「五月欄」という投稿欄が現れ、昭和二年六月八日付第四九号の「五月欄」には編輯局から「本誌は五月会員の機関紙でありますから、会員諸君の御投稿を希望します」と案内があり、五月会の機関紙であることが明確となる。昭和一一年一〇月三〇日付第九八号に至り、題号の上に「五月会報」の文字が記されるようになった。昭和一一年のことではあるが、印刷した『時事公論』総数三千五、六百通の発送作業を加藤の自宅と五月会事務所（加藤の自宅裏）で行っており、加藤の関与も明白といえる。なお、確認されている『時事公論』は表3の通りである。⁽⁴⁵⁾ 創刊から一年ほどは月刊だが、その後は刊行間隔がまちまちとなっている。これも同紙の性格が、名古屋市政友系紙から五月会機関紙へと徐々に変わっていったことを示しているようにも思われる。

同紙はタブロイド判で全二〜四頁で構成されており、最終ページはほぼ広告である。会員からは購読料をとつておらず、⁽⁴⁶⁾ 機関紙刊行の経費が広告収入のみで賄えたかはやや疑わしい（広告は診療所のものが多い）。愛知県公文書館寄託「加藤鎌五郎関係資料」にある昭和一一年の加藤日記をみると、加藤が大島宇吉を訪ねて「時事公論発行の件」を相談していることから、⁽⁴⁷⁾ 『時事公論』発行にあたって『新愛知』の援助が大きかったと思われる。

五月会の動向

『時事公論』で最初に確認できる五月会関連記事は、大正一一年一一月に加藤が政友会に入党する前に開かれた五月会秋季総会に関する記事である。⁽⁴⁸⁾ 参加者六〇〇余名を集めた総会では、小林清作による開会の辞、辻欽太郎による会務報告の後、加藤が挨拶をしている。加藤の挨拶の後、奥澤亀太郎が加藤の政友会入党を提議し、満場一致で可決さ

れた。会は会員の隠し芸などの余興により終了した。加藤は秋季大会決議に従い、床次竹二郎、大島宇吉の紹介で政友会に入党している。翌一二年四月に開かれた懇談会には四〇〇名が集まり、加藤から「流血市会」⁽⁴⁹⁾における報告が二時間にわたりなされ、五月会万歳三唱で会は終了した。

大正一二年は県会議員の改選年でもあった。選挙が行われる九月には五月会秋季大会が開かれ、満場一致で加藤を県会議員候補者として推薦している。⁽⁵⁰⁾この選挙は関東大震災直後の九月二五日が投票日となったことから、加藤は「華々しき運動は一切遠慮」するとして、選挙事務所は自宅のみ、選挙当日に投票所付近の休憩所は設置しないことを『時事公論』上で広告している。⁽⁵¹⁾このような加藤の選挙戦術を考えるうえで興味深いことは、震災を受けて尾崎行雄が唱えた選挙運動中止論を紹介する記事が、加藤の選挙広告の隣に掲載されていることである。記事によれば尾崎の主張は、候補の選挙運動が中止されれば自然と名望の高いものが当選する、運動を中止して当選した候補の名譽は運動によつて当選した者以上に尊ばれる、といったものである。この記事は「名古屋市民は華々しき運動候補者を極力排斥したいものである」という記者の言葉で締めくくられている。加藤はこの選挙戦で、尾崎の述べる理想論に同調することを選挙戦術として選んだといえよう。また、尾崎の選挙運動中止論をあえて加藤の広告の隣に掲載していることは、加藤、もしくは加藤陣営が相当意識的にこうした選挙戦術を採ったことを示しているように思われる。『時事公論』によれば、この選挙で加藤は「候補者宣言依頼状もただ友人知己だけへ千枚」⁽⁵²⁾出したのみであるにもかかわらず、一〇一八票を獲得し、定員一五人中七位で当選を果たした。

加藤の当選後には、「徹頭徹尾理想選挙を標榜したにも拘わらず、千有余の得点を得たこと」について、「五月会及び応援有志は、これ選挙界廓清の実現なり祝さざる可からず、大いに祝さざるべからず」と、当選祝賀会が五〇〇名を集めて開催された。会は五月会会員堀場萬雄の尺八・ハーモニカの余興にはじまり、加藤から謝辞が述べられた後、

①出席者は全員五月会に入会、②五月会強化、③今後の選挙でも「今一層熱烈に加藤君を応援すること」の三件を満場一致で可決した。その後は会員による余興・演説、後に名古屋講堂会の中心人物となる三輪信太郎による五月会及び加藤万歳三唱で会は終了した。⁵³「理想選挙」の成功によって、五月会の意気も高く上がったといえよう。「清廉潔白」とでもいふべき加藤の政治家としてのイメージは、加藤にとつて終生政治的資源とも、政治的制約ともなる。

第四章 政友本党期の五月会と加藤

政友本党への入党

政友会では、原敬総裁暗殺後に高橋是清が後任総裁となった。しかし、高橋総裁期には原総裁期より形成されていた高橋、野田卯太郎、横田千之助を中心とするグループと、床次竹二郎、山本達雄らを中心とするグループの対立が激化していた。大正一三年（一九二四）一月の清浦奎吾内閣成立に至り、後者が離党して政友本党を結成し、前者が政友会に残留し分裂した。政友本党が清浦内閣与党となる一方で、高橋率いる政友会、加藤高明率いる憲政会、犬養毅率いる革新倶楽部が反清浦内閣を打ちだして第二次護憲運動へと突入する。

政友会愛知県支部では、支部長で新愛知新聞社長の大島宇吉が「政友本党は、政友会本来の伝統的精神を以つて樹立することは、その宣言、政綱に見るも明かである、仍て政友本党に加盟して然るべしと信ずる」と意見を表明し、ほとんど全員が政友本党へ加入した。床次は一月三〇日付けで大島に対して感謝の書状を送っている。⁵⁴

加藤も政友本党へ入党することとなるが、ここで五月会春季大会が二月一七日に開かれている。五百余名が集まった会では小林清作が座長となった。加藤は自身の去就について意見を求めた。これに対して登壇者の加藤清之助、手

塚辰次郎らは、近年の思想悪化、危険思想の蔓延からして本党へ入党すべきであると論じ、これを受けて満場一致で加藤の政友本党入党が決議された。また、来たる衆議院議員候補者として加藤を推薦し、その当選を期すことも決議された。加藤は自らと会員諸氏の主張とが合致したことに感激していると述べ、思想悪化の昨今、過激危険の思潮を排し、穩健着実の氣風を興すことが急務であると論じた。加藤の本党入党と、政友会愛知県支部の本党入党が前後していることからすれば、五月会の決議は加藤の本党入りの形式を整えるためのものであったと推測してよからう。⁽⁵⁵⁾しかし、形式を整える必要があったことについても留意が必要であらう。

大正一三年四月の総選挙では、愛知県第一区に政友本党公認の加藤重三郎、加藤鏖五郎、政友会公認の瀬川嘉助、憲政会公認の田中善立、小山松寿、中立候補として桐生政次が出馬し、三議席を争った。憲政会公認の二候補がそれぞれ約七〇〇票を獲得し、加藤鏖五郎は四三九二票、加藤重三郎は四二二三票となり、加藤鏖五郎は一六九票の僅差で初当選を果たした。この選挙でも、五月会は加藤後援団体として名が挙げられている【前掲表2】。選挙全体の結果は、憲政会のみが議席を増やし、清浦内閣与党の政友本党のみならず、政友会、革新倶楽部も議席を減らした。選挙の結果を受けて加藤高明を首班とする第一次加藤高明内閣が成立した。加藤高明は尾張藩士を父に持ち、愛知県出身者としては初の首相でもあった。加藤鏖五郎としては、尾張・名古屋の生んだ首相と対峙することとなる。

政友本党期の加藤と五月会

加藤は当選後に開かれた第四九議会に初登院し、七月一〇日の「贅沢品等ノ輸入税ニ関スル法律案」特別委員会に参加して浜口雄幸蔵相に質問し、翌日の本会議でも同案への反対演説を行っている。加藤は議会終了後、早速議会報告を五月会と重陽会⁽⁵⁶⁾合同で開催している。加藤は議会報告のなかで、同法案は輸入品のうち贅沢品に高率関税を掛け

るものであるが、チーズや清涼飲料水、石鹼原料なども含まれるなど品種の指定がずさんであること、政府は勤儉節約を主張するが、行財政改革が優先であるなどと議会で主張したことを論じている。⁽⁵⁷⁾この他『時事公論』では、憲政会単独内閣である第二次加藤内閣成立後、上水道起債、中川運河開鑿市債など、名古屋市の諸事業が加藤内閣の緊縮策により滞っていることへの批判も紙面を飾るようになった。⁽⁵⁸⁾

一方で、五月会としても大きな出来事があった。大正一四年五月の五月会春季大会が床次竹二郎政友本党総裁を迎えて開催されたのである。⁽⁵⁹⁾会は加藤の案内で床次が登壇し、大島宇吉のほか、滝正雄、丹下茂十郎、倉元要一ら政友本党の代議士も参加し、会衆二千人は万歳で迎えた。会は辻欽太郎司会のもと、小林清作の開会の辞にはじまり、長屋弘の会務報告の後に「益結束を固うして会員の増加を図り、以て加藤代議士後援の実を挙げんことを期す」決議がなされた。この後、加藤が第五十議会報告として浜口蔵相との質問応答を披露して政府の極端なる消極政策、事業繰延、行財政整理の「失敗」、「追従外交」などあらゆる方面から加藤内閣を批判した。また、床次が政本合同の無意義などを演説し、大島宇吉の政友本党及び五月会の万歳で閉会した。会員投稿欄の「五月欄」には、大正一四年の市会議員選挙が近づいてきたこともあって、常任幹事の辻らに対して早く会員募集を行うことを求めた上で、会員を二千四五百人から一万、二万と増やさなければならぬので至急会合を開いて欲しいといった投書がなされている。⁽⁶⁰⁾大正一四年中には五月会弁論部会も組織された。⁽⁶¹⁾決議に即して五月会が会員増加を図っていることがわかる。

大正一五年一月には会員の年賀交換会が行われ、二〇〇名が参加した。この会では加藤が摂政宮成婚記念として下賜された杯を用いて、年酒一杯が参加者に振る舞われている。この場合は、単に酒を振る舞うというより、下賜品を用いた「固めの杯」の意味を持つと考えてよからう。また、この会では会員有志の寄付による福引き大会や、一同を代表した会員が自動車に乗りながら五月会旗を掲げて熱田神宮へと参拝するという行事が加わっている。会は弁論部

員と加藤の演説と続き、小林清作の五月会及び加藤万歳の後、「冷酒を汲んで醺酔裡」に散会した。一五年中には弁論部が移動部会を開催する一方で、会員による会費積み立てのうえでの一泊旅行が計画されるなど、会員の結束を固めるための様々な行事が開催されるようになっていく。⁽⁶²⁾

さて、政友本党では床次がブレンとした上杉慎吉の助言もあつて、普通選挙に備えるため各地に床次会を結成し、党の支持基盤の拡大に努めていた。愛知でも大正一五年一〇月に愛知床次会が組織され、床次も参加した発会式には三会場に一万三千人が集まった。⁽⁶⁴⁾ここで興味を引くことは、第一に五月会常任幹事から「五月会員諸君に謹告」と題して、床次会発会式への参加と入会勧誘はがきを送付されている点である。⁽⁶⁵⁾第二は「五月欄」に匿名の投書で述べられている次の点である。すなわち投書には「床次会は盛んに開かれました、而し五月会は其後どうされました、床次会も、五月会も結局は同一であります、余り放つて置いては如何と存じます」とあり、五月会としての会合の開催を求めている。これに対して編集子は「同様な御注意が各方面からあります」として懇談会や弁論部会を開くと答えている。同時代的には政友本党の「床次会」による支持基盤拡大路線が持った可能性を見出すこともできるし、戦後自民党を見据えれば、同党の特色である政党―代議士―後援会の系列関係が萌芽的にあらわれていたともいえる。

さて、大正一五年一二月二五日の大正天皇崩御により、元号は昭和に改められた。年明けの第五十二議会の会期中には、加藤高明の後を継いだ若槻礼次郎首相（憲政会総裁）と田中義一政友会総裁、床次竹二郎政友本党総裁による三党首会談が開かれ、「昭和新政」を口実に政争中止、妥協が図られた。⁽⁶⁶⁾この後、憲政会と政友本党は徐々に接近し、昭和二年二月には両党との間で「憲本連盟」の盟約が交わされ、六月には両党が合併して立憲民政党が創立された。

加藤をはじめ政友本党愛知県支部では、憲本連盟にも不満があった。政友本党愛知県支部長となっていた大島宇吉はすでに大正一四年末の段階で、多年の政敵である憲政会と提携するならば以後行動は共にできないことを床次に警

告していた。⁶⁷ 加藤としては、大島の意向に反して憲政会と合流するなどあり得なかったと考えられる。

加藤の真意は政友会への復党に決していたことは間違いないが、ここでも加藤は五月会臨時総会を四月三〇日に開いている。夜九時には四百人が集まり、加藤は「自分は白紙なり」として各会員の意見陳述を求めた。会員からは熱烈な政友会復帰論が巻き上がったが、長屋弘らが「加藤代議士は現下の政情に鑑み善処せられん事を望む」との決議文を提示したところ、それでは生ぬるいとして議論が纏まらなかった。市会議員でもある市野徳太郎が「本会は加藤代議士後援会である、縦令加藤君より謙遜な申出であつたとしても、何政党に入るべしと決議するか如きは、余りに穏当でない」として沈静に務めたが、まだ承知しない会員がおり、座長の小林清作が「聡明なる加藤君は此光景を見て、断じて諸君の意思に反せらるゝことはないと信ずる」と論じて当初通りの決議文で決議がなされた。加藤は新党には断じて参加しないと答えている。会合は、辻欽太郎常任幹事から「此際は非共新愛知の援助を得なければならぬ」という提案がなされた後、五月会から委員を挙げて、大島にも復党を願うことを決めて閉会した。⁶⁸ 先の政友本党参加の過程と比べると、政友会への復党という既定路線で事が進んでいたという共通点があるものの、決議文をめぐって市野、長屋、小林ら古参会員が押される場面が生じていた点に違いがある。その理由は明らかではないが、会の拡大と活性化がもたらした「副作用」だったのかもしれない。

第五章 政友会復党後の五月会と加藤

五月会の活動多様化

政友会復党後の五月会では、会員の結束力を高めるための様々な行事が引き続き行われている。『時事公論』と加藤

表4 五月会で行われた諸行事

会合の内容	開催日時	出典※
・五月会納涼大会（於新愛知社屋露台） 会費は不要、加藤ほかの演説と高速度輪転機の見学会。	昭和2年 8月16日	時事公論 第50号
・五月会弁論部大会（於新愛知新聞社講堂） 新愛知新聞社言論部と合同開催。加藤はじめ50名が演説。	昭和2年 11月5日	時事公論 第52号
・五月会懇談会（於武平町政友会支部） 会員の消息、政界秘話等の懇談。	昭和2年 12月4日	時事公論 第52号
・五月会幹事会 来会者500名、会員の5分間演説。	昭和4年 4月10日	新愛知 S4.4.11
・五月会大会（於第1会場帝国座・第2会場歌舞伎座） 鈴木喜三郎元内相を招待、田中首相以下各大臣の祝電披露。	昭和4年 5月20日	新愛知 S4.5.21
・五月会納涼大会（於新愛知社屋露台） 来会者2000人、冷コーヒーと冷スイカ、浪花節などの余興の後に演説会。	昭和4年 8月3日	新愛知 S4.8.4
・五月会時局懇談会（於新愛知講堂） 来会者数不明、浜口内閣糾弾演説会。	昭和5年 7月22日	新愛知 S5.7.23
・五月会家族懇親慰安会 後援会員の家族を招いた家族慰安会、詳細は後述。	昭和5年 10月27日	時事公論 第71号
・五月会年賀交換会（於新愛知講堂） 5分間演説、浜口内閣糾弾演説、家庭舞踊の披露、御真影の設置、君が代斉唱（斉唱後に御真影還奉）、加藤の演説、福引き（鏡餅、「銘酒子の日」1本各1名、木杯17名）。	昭和6年 1月7日	時事公論 第73号
・五月会青年部帝都訪問航海団の東京訪問 青年部主催、新愛知新聞社後援による3日間わたる東京訪問、総勢180名。加藤も出発から同行、27日は宮城遙拝、帝国議会議事堂、政友会本部では犬養毅総裁、久原房之助幹事長、東武総務の慰労を兼ねた激励演説、28日は自由行動。政友会本部では揮毫や3枚組の絵葉書などが配布。	昭和6年 10月26日 ～29日	時事公論 第81号
・五月会賀新会（新愛知講堂） 来会者1000人、加藤商工参与官就任祝い。加藤が参与官就任時に拝受した御真影へ敬礼、拝受した金杯で年酒振る舞い。	昭和7年 1月6日	新愛知 S7.1.6
・軟式野球五月連盟大会 多数会員の要望もあって各自の親交を深めるため野球大会開催。加藤による始球式、キャッチャーは五月会常任幹事の友田久米治。会員の野球クラブのほか新愛知の野球クラブも参加。加藤揮毫の五月連盟優勝旗争奪戦。	昭和7年 7月17日	時事公論 第85号
・政界の真相を聴くの会 田中政友会市議の市政談、横井恒治郎、高橋鉄五郎の満洲視察談、加藤からの第65議会報告、斎藤内閣成立から岡田内閣成立までの「政界秘話」、会員限定。	昭和9年 7月15日	時事公論 第95号
・御器所支部主催懇談会 御器所支部の懇談会。市議手島博章、田中政友ほか500名参加。加藤の講演と会員からの質疑と5分間演説。	昭和9年 7月15日	時事公論 第95号
・五月会物故会員慰霊祭（於覚王山日泰寺） 物故会員約320名の慰霊祭、遺族を招いて開催。	昭和11年 11月2日	時事公論 第98号

※出典は『時事公論』各号及び加藤鏡五郎関係資料W16-4362「新聞スクラップ帳」に貼り付けられている『新愛知』各号による。出典は「時事公論第〇号」、もしくは「新愛知S4.4.11」のように略記した。

資料に残されている新聞スクラップ帳をもとに、五月会の活動のなかで特徴的なものを抜き出したのが表4である。通常の大会や年賀交換会から、納涼大会、弁論大会、野球大会など様々な行事が行われていること、その内容も行楽的な要素の強いものから、鈴木喜三郎元内相招待会のように政治的要素が強いものまで多彩であることは一見して窺える。

なお、五月会事務所では昭和四年から五年、営業収益税や所得税の申告事務を会員のため扱っていたという。⁽⁶⁹⁾このほか、昭和一一年には五月会事務所を会員向けに開放している。⁽⁷⁰⁾さらに昭和一一年には物故会員の慰霊祭を行っているが、慰霊祭を行い得たこと自体が、会の求心力の強さを示しているともいえる。詳細は不明ながら、昭和九年時点ですでに地区ごとの支部もできていた。

諸行事のなかで注目すべきは、昭和五年一〇月に五月会員の家族を招く家族慰安会が開催されていることであろう。この会は、「五月会は度々開かれますが、一家揃って楽しむ家族的集会を催したこと」はないとして企画されたものである。帝國座において二回に分けて行われた会では、芝居の上演後、加藤と加藤夫人のまさえがそれぞれ挨拶をしている。「時事公論」によれば、二回とも大盛況に終わったと報じている（会費は徴収している）。加藤は挨拶のなかで「政治は生活である以上、生活の大半が台所にある以上、『政治は生活』、『生活は台所』、『台所は女性』女性でなくて真個の政治が分る訳がありません」と論じ、「女でなくて政治が分るものか」といふ時代⁽⁷¹⁾が来たとして、「お良人お父兄」への激励を依頼している。当時の政友会では政調会長山本条太郎の持論「政治の経済化」⁽⁷²⁾、「政治の国民生活化」に基づく政務調査活動がなされ、党としても経済問題を取り上げていた。加藤はそうした政党の変化を感じ取り、「政治は生活」、「生活は台所」、「台所は女性」と、五月会員の家族（多くは会員の夫人であろう）にも訴えかけていたのである。なお、五月会員家族を対象にした会合は昭和一〇年にも開かれ、遅くとも昭和一四年には正和婦人会なる婦

人団体も組織している。⁽⁷⁴⁾

以上の様に、加藤と五月会は多彩な活動を展開している。多彩に行事・活動を展開する必要が生じた理由は、会の拡大にもなつて、設立当初の「政治道徳の向上」を目的とした同志集団的性格が薄れ、加藤個人に帰属する後援会としての性格が濃くなつたことにあるのであろう。会員の結束を保つため、様々な行事を展開する五月会の様子は、戦後の後援会とほとんど変わらない様相を呈している。

このような活動を展開する五月会は、同時代においてどのように認識されていたのだろうか。先に挙げた昭和五年家族慰安会開催を伝える『時事公論』の記事のなかでは、一種の自己認識が示されている。

代議士加藤鏖五郎氏の後援団体である五月会は、此種団体中でも全国稀に見るの模範的団体たる事は世間識者の夙に認めて以て、ゆゑある哉と吹聴して居る処であるが、折詰弁当に冷酒の瓶詰で会員を集める時代は、とつくの昔に去つて、今は何事も尖端を行く時代となつたので、兎角は常に此種団体のさきがけたるべく歩んで居る同会では折詰の深さ浅さや、かまほこの厚さ薄さを気に病むやうな会合は、さらりと止めて、ずつと30年式に会員家族の懇親を主眼に五月会デー帝国座観劇家族懇親会を十月二十七日の正午と午後五時との昼夜に分つて、開催したのであるか⁽⁷⁵⁾〔中略〕

『時事公論』に掲載されている記事であることを十二分に割り引いた上で窺えるのは、代議士の後援会（「此種団体」）がすでに同時代において多く存在しており、五月会はその「さきがけ」であるという自己認識である。そして、「此種団体」が折詰弁当や冷酒で会員を集めることも常態化するなかで、「さきがけ」をいく五月会は「折詰の深さ浅さや、かまほこの厚さ薄さ」を気にするような会ではなく、「30年式」の家族慰安会を開催したということである。五月会は「此種団体」の「さきがけ」であるという自己認識は、昭和七年の野球大会を開催した記事の冒頭でも示さ

れている。⁽⁷⁶⁾

なお、昭和八年の市会選挙直前に掲載された「五月欄」での会員動静記事は、五月会系市議候補者の後援会を紹介している。⁽⁷⁷⁾ 五月会が「全国稀に見るの模範的団体」であることが、どの程度「世間識者」に認められていたかは別にしても、昭和八年段階の名古屋では後援会が市議レベルにまで浸透しつつあったのである。

五月会と選挙

それでは、様々な会活動によって、会の求心力を維持しようとしていた五月会は、選挙においてどのような機能を果たしていたのだろうか。注目すべきは、加藤の後援は当然のことながら、五月会が加藤の所属党派とは別に、市議員、県会議員を推薦するようになったことである。大正一四年の市会選挙では、加藤と小林清作のほか二名を五月会として推薦している（加藤と小林が当選⁽⁷⁸⁾）。また、昭和四年の市会選挙では、政友会推薦候補一七名のうち八名が当選しているが、五月会はこのうち七名に推薦を出していた。⁽⁷⁹⁾ 昭和八年の市会選挙では政友会から一七名が当選しているが、このうち東区からは井川一、田中政友、小林清作、西区からは伊藤勘兵衛、中区からは市野徳太郎、横井恒治郎、高橋鉄五郎、手島博章、南区から坪井研精、鈴木健の一〇名が五月会からも推薦を得て当選している。⁽⁸⁰⁾ 五月会は加藤の後援会であるとともに系列の市会議員をも輩出し始めていたのである。昭和一四年のことだが、加藤は五月会の支援を受けて当選した市議から「五月会の幹部の諸君が、市議員を軽視されること」への不平を告げられ、「観音様を拝むときは足で圧へて造つても出来あかれば拝まねばならぬです」と諭している。⁽⁸¹⁾ ここには、後援会と系列市議との関係性が如実に現れている。

なお、昭和五年の総選挙で、加藤は次点候補に一〇〇〇票差まで迫られながら当選した。このこともあって、昭和

六年の『時事公論』は「五月会へ改造の声」と題した特集を組んでいる⁸³。記事では、五月会は強固となったがそれだけに油断と緩みが生じたとして会員の様々な投書が掲載されている。具体的には、加藤が最高点間違いなしと聞いたので、政友会候補を二人当選させた方が良いと思ひ人生で初めて加藤以外に投票したという告白や、青年会員を重用して欲しい、もっと会合を開いて欲しいといった注文、あるいは加藤と同じく政友会所属の田中善立の善友会、瀬川嘉助の疎山会が拡張に努力しており五月会も遠慮がちではいけないといった注文など、会員からの様々な声が掲載されている。なかでも留意すべきは、昭和五年から加藤が政友会愛知県支部長に就任しているにもかかわらず（であるが故に？）、五月会は政友会の後援団体ではなくて「加藤君の後援団体」であることを、会員に熟知させる必要があるといった声である。同時期の新聞には、真偽の程は不明であるが、県議会議選挙の候補者公認にあたって加藤、田中、瀬川が自派のものを公認しようとするつばぜり合いを演じたあげく、支部長の加藤が「五月会の者はぜひ当選させたいが疎山会や善友会の者はどうでもよい」と放言したという記事がある⁸⁴。また、昭和七年の総選挙を直前にして発行された『時事公論』は加藤を応援するための記事に彩られているが、その一つに「五月会は政友会の五月会に非ず、加藤後援の五月会なり」と題した記事がある⁸⁵。記事は標題のとおり、五月会は加藤の政治的活動を支持する以外に目的はない、政友会の五月会の如く考えるのは趣旨の履き違えであるとして、「加藤氏の当落を犠牲にしてまで政友会を助ける必要はない」と断じている。

一方、同じ紙面は、加藤が「政治は生活である」と平素主張している立場から、議会で民政党内閣の減税案が不徹底で公約違反にあたると批判したことや、加藤が政調会の理事として、犬養総裁期政友会の看板政策である「産業五ヶ年計画」の立案に「没頭した」ことを紹介している⁸⁶。また、「産業五ヶ年計画」を実行する商工省の参与官となった加藤は「産業五ヶ年計画」、「産業国策」の「遂行主任者」であり、「言論の人より実行の人となつた」と評した上で、

加藤の参与官就任は名古屋市の実業家が歓迎しているが、これは政友会、加藤が主張する産業政策へ海外貿易伸長の期待がかけられているためであること、加藤の当選は商工業が命である名古屋の繁栄に結びつくことなどが喧伝されている。政友会の看板政策である「産業五ヶ年計画」を軸に選挙戦を戦えば、民政党候補との差異化は図れても、他の政友会公認候補との差異は見出しにくくなる。加藤と五月会は、加藤が「産業五ヶ年計画」の遂行者（商工参与官）であることを強調して、他の政友会候補に優越する地位を得、競合を制しようとしていたといえよう。

なお、昭和七年の『時事公論』「五月欄」には、加藤の政治的地位が上昇するなかで、加藤が上京して不在がちであることへの不満も投書されている。「議会中は別として）年中小学生の便宜を御計り下され度切望仕候、然らざれば、所謂公僕の意義消失することにあらざるか」といった内容である。これに対して記者は、私達が加藤を推薦する所以は、諸君の雑用に加藤を煩わせるのが主目的ではなく国政を研究調査して貰うことにある、よって上京がちなものも仕方がない、「私共は余りの些事に同氏を煩はし度ないので、色々なお用は五月会の事務所があり、夫々機関もあります」から、同氏不在と雖も相談役立つ積りです、公僕の意義御誤解なき様希望します」といった返事がなされている。¹⁸⁷

加藤の政治的な活動のうち、経済問題がしめる割合が増えてくると軌を一にして、五月会員の中にも加藤や五月会に「便宜を御計り下され度」といった個別利益を求めるものが増えつつあったといえる。また、記者は「公僕の意義御誤解なき様」と苦言を呈しているが、一方で「色々なお用は五月会の事務所があり、夫々機関もあります」と心えている。加藤、そして五月会が細かな陳情処理の役割をも果たしていたことを示唆しているよう。先述の会活動の多彩さとあわせて、五月会は設立から一〇年が経つうちに後援会としての性格を強めたのである。

加藤の政治活動と『時事公論』

さて、大正期以来「国民生活」という社会領域が浮上するなかで、政治の第一目標を「国民生活の安定」におく主張は珍しいものではなくなった。⁽⁸⁸⁾ 加藤の主張も初めて市会選挙に出馬したときとは異なり、徐々に経済、生活に関する主張が増えていく。『時事公論』は加藤の議会ででの活動を紹介しているが、取り上げられるのは大正一三年の第四九議会で「贅沢品等の輸入税に関する法律案」特別委員会における奢侈税に関する加藤の質問や、昭和二年の第五二議会の本会議における加藤の営業収益税に関する質問であった。また、昭和三年の総選挙を前にして発行された『時事公論』は「帝国議会に於ける加藤鏠五郎君奮闘史」と題した記事を掲載しているが、紹介されているのは奢侈税で浜口蔵相と、薬品法をめぐる若槻首相と渡り合い「大成功」を収めたことや、営業収益税、農村電化、大都市制に関わる問題であり、思想・外交問題は一つもあげられていない。⁽⁸⁹⁾

昭和七年の総選挙で加藤が商工参与官という立場を活かした選挙戦を行ったことは先に見たとおりである。犬養毅内閣崩壊後に参与官を辞任した後も、昭和七年の第六三議会の「商業組合法案外一件」特別委員会で加藤は、農村救済のため内務省・農林省の予算が拡大する一方で、中小工商业者救済のための予算は商工省でわずか三九万円しか計上されていないとして営業収益税の免税点引き上げなどを主張した。⁽⁹⁰⁾ また、第六五議会で加藤は「貿易調節及通商擁護に関する法律案」（いわゆる「通商擁護法」）特別委員会委員長を務めていた。いずれも議事録の加藤に関わる部分が『時事公論』に転載されている。⁽⁹¹⁾ なお、通商擁護法は外国による日本製品への高率関税、輸入制限措置といった貿易調整政策への対抗措置（輸入税の変更、輸出・輸入制限）を定めたものである。⁽⁹²⁾ 同号の「五月欄」には蘭印における陶磁器輸入割当制への対抗措置として、対蘭印向け陶磁器積止（昭和九年）を執行した陶磁器貿易業者と思しき人々からの投書がある。「東区一輸出商」からの、陶磁器業界では積止まで執行し決議文まで発表しているので「代議

士諸公に於ても、大に骨折つて貰いたし」といった投書や、「中区「貿易商」からの「吾々貿易商は、今や日蘭問題で血眼になつて戦つて居ります、通商擁護法を振り廻す時が来ます、加藤代議士の御自重を祈ります」という投書である。こうした投書は、加藤が「言論の人」から「実行の人」へと自身のイメージを転換させようとするなかでの素材として、『時事公論』に掲載されたのであろう。

加藤の中央政界での活動が、商工行政に関わるものが中心となつていくなかで、加藤もより一層自身を名古屋選出の商工議員として宣伝するようになる。その点が端的に表れているのは、昭和一四年の衆議院再選挙である。加藤は昭和一二年の総選挙で七〇〇票差で落選した。その後は新愛知新聞社の顧問として記事を執筆しながら再起を期したが、そのチャンスは意外に早くやつてきた。愛知県第一区で当選した日本革新党の山崎常吉の当選が無効となつたため、昭和一四年五月に再選挙が行われることとなつたのである。この選挙では、民政党が候補を擁立せず、選挙戦は政友会公認の加藤と山崎、政友会員の瀬川嘉助ら五名で争われた。加藤は小山松寿から「常識では小山と加藤といふことになつて居る、私の方は起てぬ」と申し入れを受けており、民政党の応援も得て当選している⁽⁹³⁾。

雪辱を期したこの選挙で加藤陣営が作成した両面刷りの印刷物には、加藤を推薦する人々の推薦文が掲載されている【表5】。多様な人々からの推薦を得ていることがわかるが、貴族院議員下出民義「商工行政と加藤君」、第一第二名古屋女子商業学校長市邨芳樹の「世界我が市場 貿易政策の加藤君」、瀬栄合資会社社長水野保一（陶磁器商）の「商工行政に明るい加藤氏を議会へ送れ」といった、加藤が商工行政に通じていることを強調する記事が多く見られるようになっている。これらの推薦文は、産業経済の実情に通じ、商工行政に明るい人物を議会に送るべきだとして、加藤を推薦するものである。

そして、大正期から昭和期にかけて加藤の政治活動の変化を取り上げているのは、元名古屋市議・元名古屋市長大

表5 加藤鏗五郎推薦文一覧（昭和14年）

題名	筆者	肩書き	掲載面
問題はたゞ人である 加藤君を当選させて下さい 郷里の皆さまに是非お願ひ	松井石根	内閣参議・陸軍大将	表面
商工政策と加藤君	下出民義	貴族院議員	表面
スローガン	若山東一	(医師)	表面
東春出身の各位へ	田中斎	(国民新聞【新愛知傘下】主幹)	表面
政治的な意志を加藤君に依て実現	大島宇吉	新愛知新聞社社長	表面
今度はカトウ	藤部文一	筒井町	表面
尾張部十一人の代議士中政友会は唯一人	樋口善右衛門	衆議院議員	表面
加藤君公認推薦に際して	樋口善右衛門	愛知県政友会支部幹事長	表面
親友加藤君を推薦す	尾関重	宮本物産常務	表面
必至の雪辱戦 滅私奉公の覚悟で起ち上つた応援陣	市野徳太郎他9名	(県・市会議員)	表面
謹んでお詫び申上ます	辻欽太郎・友田久米治・長屋弘	(五月会常任幹事)	表面
商工行政に明るい加藤氏を議会へ送れ 十人の代議士より有力	水野保一	瀬栄合資会社社長	裏面
筋肉労働者諸君 清き一票を有効に	高野源三郎	杉村町	裏面
少壯雄弁から政策経綸へ	大喜多寅之助	(元名古屋市長)	裏面
世界我が市場 貿易政策の加藤君	市邨芳樹	第一第二名古屋女子商業学校長	裏面
政治家には稀な人間の確かさ	梶山正弼	梶山女学園長	裏面
加藤のをじさん	小林龍二郎	愛知淑徳高等女学校長	裏面
「時代の若さ」を持つ政治家	大野正直	弁護士	裏面
理髪界の大恩人	服部正一	愛知県理髪業聯合会会長	裏面
車の両輪	櫻木俊一	新愛知理事	裏面
カトウと書いて下さい	松波寅吉・黒田三樹三	(愛知県医師会長・副会長)	裏面
酒と煙草と加藤さん	近藤政寿	中村	裏面
一昨年選挙の報恩 全力を尽くし加藤君へ	鬼丸義齋	弁護士	裏面
眞実一路で清廉な人	栴田安太郎	東京	裏面
女から見た加藤先生	奥澤登起	名古屋ミシン裁縫女学院長	裏面
ポケット工場衛生の著者加藤さん	磯部鶴太郎	愛知時計	裏面
気の毒な立場の加藤さんを救へ	丹羽重左衛門	都島町	裏面
眞摯奉仏の加藤君を推薦す	山田奕鳳	高顕寺	裏面
カトウ君をお助け下さい	日向野善次	名古屋土木建築請負業組合	裏面
カトウ君を御援助下さい	田中清吉	所得税調査委員	裏面
推薦の辞	多々羅恬一	(『時事公論』元発行編集兼印刷人)	裏面

※ほとんどの人物に肩書きが付されているが、一部付されていない人物については肩書きを補った(括弧書きが補足部分)。肩書きに地名のみ記されている人物についてはそのまま地名を記した。

喜多寅之助の「少壮雄弁から政策経綸へ」である。大喜多の推薦文は、加藤が県市会議員時代から弁論の雄として「実
に華やか」な存在であったことを振り返る。一方で、「政治家の生命は弁論にもあるが而し時代は更らに進んでそれ以上
政策経綸の実行が政治家の第一任務とせられて来た」と政治家の任務が変化していると述べている。そして、加藤は
衆議院当選以来政策研究に没頭し、それによって「実力在中堅政治家」として商工参与官にも選ばれ、商工政策に
対する抱負は議会で披露され重きをなしているとして加藤を推薦している。大喜多の推薦文は、政治家に求められる
資質が弁論から実行へと変化していること、加藤が弁論と実行という二つの資質を持ち合わせていることを宣伝する
ものである。図らずも政治家としての加藤の変化を指摘するものとなっているともいえよう。

さて、『時事公論』は昭和一二年刊行の第一〇一号までしか発見されていないため、その後の五月会については新聞
記事と加藤の日記から簡単にみておく。⁹⁴日中戦争開戦後の昭和一三年六月には、五月会出征家族のための武運長久祈
願祭が名古屋市末広町の若宮八幡社で執り行われ、家族百五十余名が参列した。加藤は出征家族へ感謝の挨拶をして
いる。⁹⁵昭和一四年、一六年、二〇年の加藤日記をみると、昭和一七年一月五日には例年どおり賀新会が行われている。
同年三月一日には常任幹事だった辻欽太郎が没し、加藤は五月会を代表して弔辞を読んでいる。同年の翼賛選挙では、
五月会員すべてにはがきが送られるなど、これまでと同様に五月会が加藤の支持母体であったことがわかる。翼賛選
挙では、五月会系の一部市会議員が愛知県第一区から出馬した下出義雄（下出民義の子、実業家）陣営に転じること
もあったが、加藤は三万票を超える大量得票で当選を果たした。しかし、これ以降は五月会に関する記述はほとんど
みられなくなる。また、加藤は昭和一〇年代から五月会の中心的人物の結束力を高めるため「五三会」という団体も
結成しており、⁹⁶例月で時事問題を研究する会合を持っていたが、この五三会についての記述も昭和一八年以降見られ
なくなった。戦時下において、五月会は事実上休止を余儀なくされたようである。

おわりに

本論では、大正二年の加藤の政界進出から昭和一〇年代までの動向を、特に後援会五月会と『時事公論』を中心に検討した。明らかとなったことは政治家としての加藤、加藤を支援する五月会が、相互に作用し変化していったという点である。清廉潔白と雄弁を売りとした加藤は、政治の第一目標を「国民生活の安定」におく主張が一般的なものとなるなかで、「政治は生活」であると訴えるとともに、大都市名古屋にふさわしい商工政策に造詣の深い政治家へと自己のイメージを更新した。「政治道徳の向上」を旗印として結成された五月会は、会員数の増大とともに会員からの具体的な要望を聞き、会員の結束を高めるための様々なイベントを企画するようになった。五月会は、設立当初の「政治道徳の向上」を目的とした同志集団の性格が薄れ、加藤個人に帰属する後援会としての性格を濃くしたのである。後援会としての五月会は、加藤の政治活動の展開とともに徐々に形成されたともいえよう。

さて、戦前期における後援会の事例研究は少ないことから、本事例を以て戦前期後援会の代表例とすることはできない。愛知県において後援会が活発であったことからすれば、本事例は戦前日本における後援会の先進事例とも考えられるが、こうした位置付けについては、さらなる事例を積み重ねた上で論じられるべきであろう。「戦前日本の個人後援会」の全体像については今後の課題としたい。

註

- (1) 佐藤能丸『近代日本と早稲田大学』（早稲田大学出版部、一九九一年）、「大隈伯後援会に関する一考察」。
- (2) 時任英人『犬養毅—リベリズムとナシヨナリズムの相剋—』（論創社、一九九一年）九頁。
- (3) 阪上順夫『尾崎行雄の選挙—世界に誇れる罌堂選挙を支えた人々—』（和泉書院、二〇〇〇年）。
- (4) 渡邊宏明『普通選挙法成立後の政友本党の党基盤—「上杉博士の政友本党論」を中心に—』（東京大学日本史学研究所『究室紀要』第一六号）二二—二五頁。床次会については、前山亮吉「政友本党の基礎研究—現存する「党報」を素材として—」（『国際関係・比較文化研究』五一—、二〇〇六年）等も参照のこと。
- (5) 上山和雄『陣笠代議士の研究』（日本経済評論社、一九八九年）三—三頁。
- (6) 「後援会と日本の政治」『年報政治学』四五、一九九四年。ただしこの評価は一九九四年選挙制度改革以前のものであることには留意が必要である。
- (7) 以下の研究史整理は前掲「後援会と日本の政治」及び山田真裕「自民党代議士の集票システム—橋本登美三郎後援会、額賀福志郎後援会の事例研究—」（筑波大学博士学位論文、一九九三年）。
- (8) サイマル出版会、一九七一年、復刻版は二〇〇九年。このほか中曾根康弘後援会を検討したN・B・セイヤー、小林克己訳『自民党』（雷華社、一九六八年）もある。
- (9) 前掲「自民党代議士の集票システム」。
- (10) 櫻井良樹『帝都東京の近代政治史』（日本経済評論社、二〇〇三年）、第二章、第六章。このほか、季武嘉也「中田儀直にみる昭和戦前期の地方政治」（『創大人文論集』六一—六、一九九四年）など参照すべき研究もある。
- (11) 内務省警保局保安課「政事関係議会議資料」内、山岡萬之助関係文書（国立国会図書館憲政資料室所蔵マイクロフィルムR二四、原蔵学習院大学法学部・経済学部図書センター）。
- (12) 上山は都市化と大衆社会化とが後援会設立の理由としている。よって、大阪、愛知だけではなく、東京でも後援会が活発であつてよいはずだが、東京は「被後援者数」のみで三位になっている。その理由は別に検討する必要があるだろう。
- (13) 加藤在学中の明治三六年に愛知県立医学専門学校として新発足、愛知医専は愛知医科大学、名古屋医科大学、名古屋帝国大学医学部と変遷をたどる。
- (14) 以下の記述は加藤庄三著・加藤延夫監修『加藤鏝五郎伝』（名古屋大学出版会、一九九五年）の年表による。

- (15) 前掲『加藤鎌五郎伝』四六頁。
- (16) 『新修名古屋市史』第六卷(名古屋市、二〇〇〇年)、一一八～一二〇頁。
- (17) 「新聞スクラップ帳(コピー製本)」(愛知県公文書館寄託「加藤鎌五郎関係資料」明治三八年～昭和二年、W一六一～一三六三、以下同資料群については、W一六からはじまる請求番号のみ記す)。スクラップには「大正二年十月大朝」とある。
- (18) 稲田学編『市野徳太郎氏伝』(昭和一五年)、手島益雄『名古屋百人物評論』(日本電報通信社名古屋支局、一九一五年)。
- (19) 「新聞スクラップ帳」(明治四一年～四二年、W一六一～一四二七)の記事「藏内氏立候補演説会」、掲載紙・年月日は不明。
- (20) 「新聞スクラップ帳」(大正二年～大正五年、W一六一～一四三〇)九頁の記事「市会議員三級候補者加藤鎌五郎君」。
- (21) 前掲「新聞スクラップ帳」(W一六一～一四三〇)。掲載紙・年月日は不明。
- (22) 有馬学『「国際化」の中の帝国日本』(日本の近代4中央公論新社、一九九九年)二六～二九頁。
- (23) 前掲「新聞スクラップ帳(コピー製本)」(W一六一～一三六三)の選挙広告より。掲載紙、掲載日は不明だが、大正三年に新愛知主筆となった桐生政次の名前があること、広告内に「市会議員三級候補者」とあること、大正一〇年の市会選挙から三級に別れていた等級選挙が二級となったことから、広告が大正六年の選挙時に出されたものであると推測できる。
- (24) 『愛知県医師会史』(愛知県医師会、一九五五年)二二頁、二八頁。
- (25) 前掲『愛知県医師会史』三〇頁。
- (26) 『関西医界時報』は「関西」の名を冠しているが、発行地は名古屋である。「関西医界時報」概略」名古屋大学附属図書館研究開発室ウェブサイトより <http://libstnui.nagoya-u.ac.jp/report/others/img/kai/outline.pdf>、二〇一六年一月二三日閲覧)。
- (27) 『関西医界時報』大正六年十一月一日(前掲「新聞スクラップ帳(コピー製本)」W一六一～一三六三)。
- (28) ただし、大正一三年に市医師会会長松波寅吉名で加藤推薦状が出された際には、一部医師会員から反発も起きている(『名古屋新聞』大正一三年四月五日、前掲「新聞スクラップ帳(コピー製本)」W一六一～一三六三)。
- (29) 『名古屋新聞』大正八年九月二七日(前掲「新聞スクラップ帳」W一六一～一三六三)。
- (30) 加藤鎌五郎「偉人大島老社長」(『新愛知』昭和一六年

- 一月五日)。なお、当該期に於ける名古屋市政界の動向については、真野素行「戦間期の市域拡張による都市経営と市政の変容」名古屋市の市電問題を中心として―(『近現代史研究』創刊号、二〇〇九年)を参照のこと。
- (31) 『名古屋時事』大正八年九月二四日。
- (32) 前掲「加藤鎌五郎」六〇―八〇頁、前掲「新聞スクラップ帳」(W一六一―一三六三)、掲載紙、掲載日は不明だが、内容から大正六年市会選挙の記事と推測できる。
- (33) 『名古屋時事』大正九年五月三一日、知山生「懐愴なりし露天演説」より(『名古屋時事(製本)』W一六一―一四三二、以下『名古屋時事』はすべて同製本版からの引用である)。「名古屋時事」は名古屋市会議員でもあった市野徳太郎が経営する新聞であり、知山は市野の号である。
- (34) 『名古屋時事』大正九年六月一五日の「加藤氏後援者懇親会」より。
- (35) 市野徳太郎「吾日誌」(『名古屋時事』大正九年六月一五日)。以上各人の略歴のうち、小林清作、辻欽太郎を除いて『名古屋時事』大正九年五月三一日の「加藤君応援弁士批評」による。
- (36) 前掲「愛知県医師会史」四四頁。
- (37) 『新愛知』大正一三年五月一〇日。
- (38) 『名古屋新聞』昭和七年二月一三日。
- (39) 『名古屋ジャーナル』昭和三十六年八月八日号(名古屋大学文学書資料室寄託「加藤鎌五郎関係資料」(以下名大加藤資料)八二)。
- (40) 加藤日記昭和二八年四月二四日条(W一六一―二三七四)。愛知県公文書館寄託資料のうち、加藤の日記については「加藤日記」と略記し、請求番号のみ記した。
- (41) 『時事公論』第六三三号(昭和四年一二月五日)、二二面、同第八八号(昭和八年一月二五日)、二二面。
- (42) 加藤日記昭和二六年一二月一六日条(W一六一―二三七二)には、「四十年來余の秘書役をとめた水野君、殊にこ、十年間、自分のことのようにして病院にとめた水野君」とある。病院とは加藤が戦後に開院した喜安病院のことである。
- (43) 前掲「加藤鎌五郎伝」九三頁。
- (44) 加藤日記昭和一二年一月三〇日条(W一六一―二三六四)。
- (45) なお、同表に『時事公論』の刊号数、発行年月日、名大加藤資料における整理番号を記しているため、『時事公論』の引用は刊号と発行年月を記し、整理番号は略す。
- (46) 『時事公論』第一〇二号の「五月欄」掲載の「雑誌代をとれ」という投書には、頻繁に五月会機関紙『時事公論』を出すため雑誌代を取った方がよいとある。裏を返せば雑

- 誌代は徴収されていなかったということになる。
- (47) 加藤日記昭和十一年七月九日条(W一六一三三六四)。なお、戦前期の加藤日記は昭和十一年、一四年、一六年、二〇年のみが残存している。
- (48) 『時事公論』第九号(大正十一年一月二七日)、三面。
- (49) 名古屋市は隣接十六ヶ町村を大正十年に合併したが、旧町村役場は区役所分所として存置された。しかし、一二年二月に川崎卓吉市長が分所廃止を市会に提案した。これをきっかけに市会政友系と非政友系の対立が激化し、市議会における乱闘騒ぎに至った。(前掲『新修名古屋市史』第六卷、二六四～二六六頁)。「流血市会」はこの一連の経緯を指している。
- (50) 『時事公論』第一八号(大正十二年九月一七日)、二面。
- (51) 『時事公論』第一八号(大正十二年九月一七日)、一面。
- (52) 『時事公論』第一九号(大正十二年一月五日)、一面。
- (53) 遠山佳治「名古屋女学校・名古屋高等女学校時期における建学の精神および教育理念の一考察(2)」名古屋聖学院会を中心にして(『総合科学研究』四、二〇一〇年)。なお、加藤も名古屋聖学院会に参加している。
- (54) 尾佐竹猛監修『大島宇吉翁伝』(新愛知新聞社、昭和十七年)二六九～二七〇頁。
- (55) 『時事公論』第二三三号(大正十三年四月一六日)、三面。
- (56) 重陽会は大正十一年九月に名古屋市の振興を計るため結成された会で、「第二五月会とも称すべき団体」であったという(『時事公論』一六号、三面)。
- (57) 『時事公論』第二七号(大正十三年九月二一日)、一～三面。
- (58) 『時事公論』第三六号(大正十四年九月二一日)、一面。
- (59) 『時事公論』第三四号(大正十四年六月二二日)、一面。加藤の演説要旨は二面から三面にある。
- (60) 『時事公論』第三六号(大正十四年九月二一日)、三面。
- (61) 『時事公論』第三八号(大正十四年二月一五日)、二面。
- (62) 『時事公論』第四三三号(大正十五年七月二六日)、二面、四面。
- (63) 前掲「普通選挙法成立後の政友本党の党基盤―上杉博士の政友本党論」を中心に。
- (64) 前掲「政友本党の基礎研究」七九～八〇頁。
- (65) 「新聞スクラップ帳」(W一六一三三五九)にはがきが添付されている。
- (66) この間の経緯は村井良太『政党内閣制の成立』一九一八～二七年(有斐閣、二〇〇五年)二六四～二七二頁。
- (67) 前掲『大島宇吉翁伝』二七〇～二七一頁。
- (68) 『時事公論』第四九号(昭和二年八月八日)。

- (69) 『時事公論』第七一号(昭和五年二月一八日)、二面。
- (70) 『時事公論』第九八号(昭和十一年一月三〇日)、三一面。
- (71) 加藤隼五郎「女性へ呼びかける」『時事公論』第七二号、昭和六年一月一日。
- (72) 手塚雄太「昭和恐慌と政友会」(『史学雑誌』一二〇一六、二〇一一年)。
- (73) 『新愛知』昭和一〇年六月一三日・一四日(前掲「新聞スクラップ帳」W一六一―三六二)。
- (74) 加藤日記昭和一四年一月一六日条(W一六一―三三六五)をみると、「婦人正和会」で加藤が「欧州其他の外交関係」と題した講演を行っている。なお、加藤の支援者だった小林清作は婦人問題研究会という婦人教育のための研究会も運営していた(中山恵子「大正期の名古屋の婦人教育」名古屋女性史研究会編『母の時代』風媒社、一九六九年)。
- 加藤夫人のまさあや、名古屋ミシン裁縫女学校長奥澤亀太郎夫人のときも同研究会に参加しており、昭和三年には市川房枝を招いた茶話会も行っている(伊藤康子『草の根の婦人参政権運動史』吉川弘文館、二〇〇八年、第二章参照のこと)。
- (75) 『時事公論』第七一号(昭和五年二月一八日)、二面。なお、昭和六年の記事でも同様の自己認識が示されている。
- (76) 『時事公論』第八五号(昭和七年一月一日)。
- (77) 『時事公論』第八九号(昭和八年二月二五日)、三一面。
- (78) 『新聞スクラップ帳』(W一六一―二六五二)。掲載誌、年月日とも不明だが、記事中の「尾張内閣」の文言から大正一四年市会議員選挙時の記事であることがわかる。
- (79) 『時事公論』第六五号、二面及び『新愛知』昭和四年一月二十八日(「新聞スクラップ帳」W一六一―三三六二)。
- (80) 『新愛知』昭和八年一月二七日。
- (81) 『時事公論』第九三号、昭和八年二月二六日。
- (82) 加藤日記昭和一四年二月一七日条(W一六一―三三六五)。
- (83) 『時事公論』第七二号、一面。
- (84) 平田生「地方政戦往来一五 愛知県巻 各党ともに同志打」(「スクラップブック、大正十四年市会議員総選挙・昭和四年市会議員総選挙、昭和六年県会議員総選挙」) W一六一―二六五二)、掲載誌は不明。
- (85) 『時事公論』第八二号(昭和七年二月一六日)、四一面。

- (86) 加藤は昭和五年に政調会特別委員会で「国民負担の軽減及び其均衡」委員会委員、六年に政調会理事を務めた。
- (87) 第八八号、昭和八年一月二十五日、二面。
- (88) 前掲「昭和恐慌と政友会」。
- (89) 『時事公論』第五四号（昭和三年二月一日）、一―二面。ただし、議事録を見る限り三ページ程度のやりとりである。また、大正一五年の朴烈事件発覚後は若槻内閣を激しく批判し、山中外交を擁護している（『時事公論』第六三―号）。
- (90) 『時事公論』第八五号（昭和七年一〇月一日）、一面。
- (91) 『時事公論』第九五号（昭和九年八月一七日）、一―三―面。
- (92) 通商擁護法に関する記述は秋谷紀男『戦前期日豪通商問題と日豪貿易』（日本経済評論社、二〇一三年）の第二章「一九三六年豪州貿易転換政策と日本の対応」による。
- (93) 加藤日記昭和一四年一月二五日条。また、五月二二日条には「民政党の応援は相当也」と記されている。
- (94) 『名古屋時事』第三三五号（昭和一四年一月一五日）の「新年諸家に聴く」では「興亜新春の五月会報発刊に先だつて、昨年末会員各位より左記要項にて御寄稿を御依頼したるところ」とあり、市野徳太郎が刊行していた同紙が五月会機関紙になったようだが、経緯等は明らかではない。な

お、以下特記のない限り、記述は加藤日記各年による。

(95) 『新愛知』昭和一三年六月二日（前掲「新聞スクラップ帳」W一六一―一三六二）。

(96) 五三会は「時事問題を研究討議事時局に関する認識を明確にするを以て目的」として設立された団体である（羅生「五三会の記」『名古屋時事』第三三五号、昭和一四年一月一五日）。太平洋戦争敗戦後、公職追放から復帰した加藤が五月会を再興するなかで、支援者から「五月会発展策に就いて五三会の如きを組織したし」という申し入れを受けていることから、五三会が五月会の別働隊の組織だったことがわかる（加藤日記昭和二七年一月一九日条、W一六一―一三三三）。

〔付記〕

本論文の掲載決定後、車田忠継「戦前期中選挙区制度における選挙構造と地域政治秩序―千葉県第一区東葛飾郡と川島正次郎を中心に―」（専修大学提出博士論文、二〇一五年）に接した。同論文は川島正次郎を中心に、千葉県第一区の候補者達が後援会を築く過程を、新聞記事や地域博物館等に所蔵されている選挙関連の印刷物を用いながら明らかにしている。